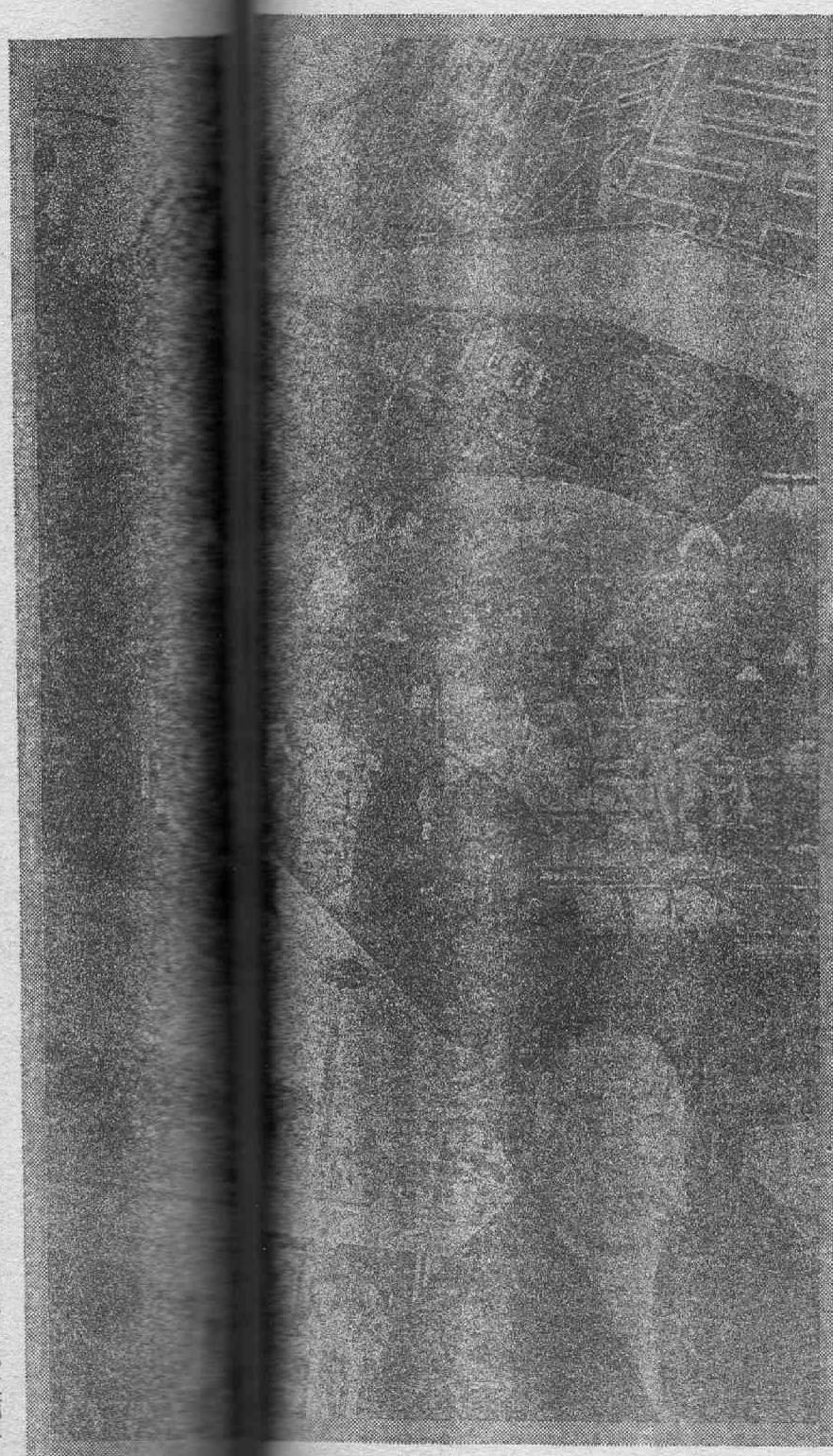


特集・浅草の灯よいつまでも③

敗戦三文オペラ「私の焼跡放浪記(その一)

エンコ慕情へ浅草編

竹中 労



浅草の夜のにぎわいに
まぎれ入り

まぎれ出で来しさびしき心（啄木）

浅草の荷風散人

……その人をふと見かけたのは、地下鉄の中であった。これ以下、ルンペンといった、みすぼらしい風態の老人である。黒サージのくたびれた背広、ゲタばき、ノーネクタイ、度の強い鉄ブチのメガネをかけて、屈託した表情で、窓の外に飛び去る闇を眺めていた。

もう昼をとうにすぎた時刻だったが、手提げカバンを小脇にしつかりと抱いている姿は、みじめな家庭から、みじめな職場に通勤する下級俸給生活者のように見えた。それは

一九五二年、敗戦七年という歳月が流れ、巷からモンペや復員服姿が消えて、ものみな復興の生色をとり戻していたころである。かくいう私もまがりなりに、ホームズパンの上衣など一着におよび、ズックではあったが、とあれ鞆の形をしたものを探して、宿無しにしては見られる服装だった。

戦前の修身教育のおかげで、老人と見れば席をゆずる癖のある私は「どうぞ」と声をかけて立ち上がった。アアと軽く会釈して、微笑した唇からもれた乱杭歯を、まつ正面に見ただん、その人が『みらんす物語』『踊子』『浮沈』の作家であることを、私は発見したのだった。

「荷風先生ですね」と、素直にいうべきであつたかも知れない。だが私は、わざと気づかぬふりをした。内心ではドギマギしていたのだ。その人の文学に傾倒していた。エンコ（浅草）、ノガミ（上野）から、山谷・高橋・森下のドヤ街へ、ジュク（新宿）、ラクチヨウ（有楽町）の陋巷に、漂泊をしていったわが無頼の青春期は、永井荷風の小説に多分に負うのである。その人を眼の前にして、話しかける千載一遇の機会にめぐりあいながら、一所懸命そっぽをむいていたのだ。田原町につくと、七十歳をこえた老体とは思えぬ、かかる足どりで、荷風散人は私には目もくれず、プラットホームに降り立つていった……

そう、いつもなら私も、仁丹塔の手前から信号を渡り“十二個食べたらタダ”的大福モチの看板をくらみつけて（挑戦して九個で敗退したのだ）、六区に折れていく。だが、その日は雷門まで行って降りた。夏の炎昼のよ

うな油照りの仲見世を、私は何処へというあ
てもなく、ふらりと歩いていった。
きっと先刻の地下鉄の中で、みすぼらしく
屈託していた、荷風散人と同じ眼をしていた
と思う。

人として、名前ぐらいしか知らなかつた。が、私の浅草への思い入れは、意識するとして、ないとにかくわらず、それらの先達と同じ情念において、同じ道をたどつた。

若き日を彩つた浅草への情念

五・三〇事件……当時は淀橋警察署のつた現在の新宿警察署を襲って、公務執行妨害、東京都条例違反、火薬類等取締法違反等々の容疑で私が逮捕されたのは、それから数日後であった。

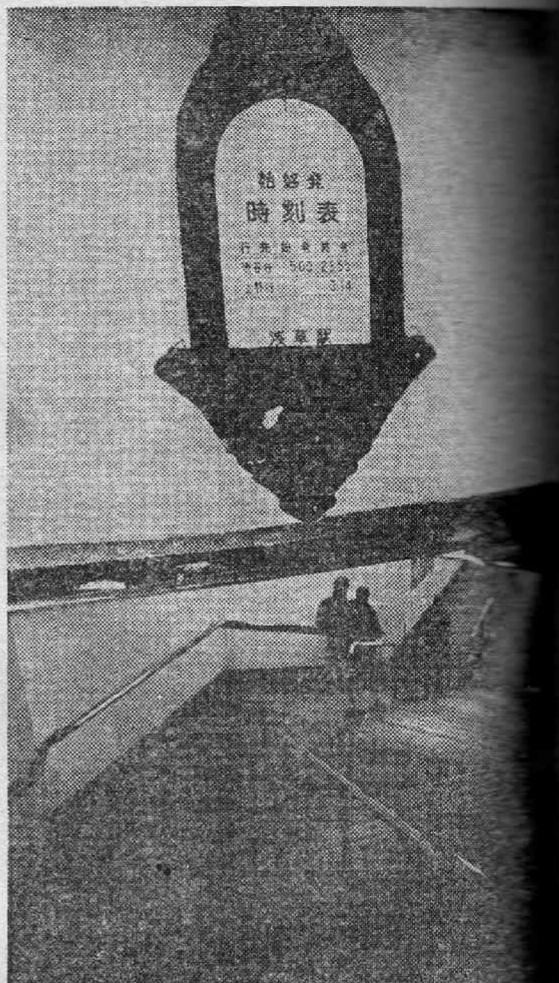
ストにちかがつた。かつて大正という明治の付録のような、あるいは昭和の前座のような、みじかい時代があつて、陋巷をすみかとした「美的浮浪者」の群れがいた。いわく、ダダアーティスト辻潤、その妻野枝をうばつた大杉栄、

学生運動家にあるまじき無法の所業に、同士たちはあきれ果て、しかも私が彼ら伦パンプロレタリアートを革命の同盟軍であると、固く信じていることに、ますます以て愛想をつかし、こういう乱心ものを組織の内部には置けないと、除名を申しあわせていた。五・三〇の尖兵を志願したのは、そうした空気を察知したこと、誰ぞわれにピストルに向けよかし、ものの美事に死んで見せよう、

敗戦直後の一九四七年から四九年まで、足かけ三年間を彷徨した浅草界隈を、いわば見納めに出かけたのだ。そのころ革命という狂気に、多勢の若者たちが捉えられていた、私もその一人であった。おまけに虚無という厄介な虫が、胸の底に巣喰っていた。生きていてもしかたがない、さりとて自殺は男の仕業ではない、首吊りなどという醜悪な行為はまづびら御免をこうむる、死ねばええがな、ただ死なんぞ。

郎である)、ふらりひょうたん高田保津喜喜
オペレッタの創始者伊庭孝、座付作者の猿
太平(のちに活動写真に転向して『旗本退屈
男』シリーズを撮る=古海卓二)、シナリオ
作家寿々喜多呂九平、混血の不良少年大泉黒
石、そして若き日の今東光……。そのころ、
敗戦直後の二十歳、いわば“伝説の世界の住

すでにその間のいきさつを、『無頼と荊冠（三笠書房）』という著作に私は書いた、この連載でつづりたいのは、いま一つの『心象風景』、『仮装者の恋』で宮崎省夫が描いた、六区のうすぐらい路地、あわただしい性欲の匂い、娼女たち、尺八のかなしいメロディ、龜



つてクダを巻く人足、日雇い諸君、電気プラ
ン、灰色の倦怠、ニヒリズム。

にはいさか待むところがある。

それは、樋口一葉『にごりえ』から、徳田秋声『足跡』、永井荷風『澤東綺譚』『黙草』と系譜をひき、武田麟太郎の『日本三文オペラ』、高見順の『如何なる星のもとに』に至る市井窮巷の自由についてである。そう、私もかつて詩を書いた、『武闘』に奔ったのは文學的才能に絶望したからではない、いまルボライター、もの書きの端しきれとして、文章

永井荷風のうたえる——、「されど老樹は猶枯れやらず、残りし皮残りし骨に、あわれ

わが街の見納め

……前置きが長くなつた。わが街・浅草を語ることにしよう。下町で育つた幼年時代、大人たちに遊びにつれてもらつた浅草

六区、仲見世、觀音堂、アラカン嵐寛寿郎、
一ト』である。

醜き姿を日に曝す、吹けよ老樹にはあらし、人の身には死よ！嗚呼されど、願うものは來

鞍馬天狗のおじさんとの出会い、ヤキソバの香り、四万六千日、河金のトンカツ、『衛生博覧会』（稻村興行部）、狸横丁の釜めし、三友軒の合の子弁当（シユウマイ&コロツケetc）、ええハヤラ一丁、いわづもがなハヤシライス、お西様のにぎわい、射的場のお姉さん。

脈絡もなく脳裏をよざる、『回想のエンコ』についても、さきごろ上梓した拙者『鞍馬天狗のおじさんは』（白川書院刊）のまえがきなどで、折にふれ活字にしてきた。いま私が語ろうとするのは、昭和二十年代の浅草、戦火をくぐつてなお「その流れの底にほの暗い淀みを、まだ霞のような悲しみを、青白い光のような」（川端康成）詩情をただよわせ、邪道の職業者、犯罪者、失業者群、不良少年少女、世をすてた浮浪人・コジキにとっての樂園であった浅草、その『青春遊泳ノ





らず、望むものは去る」（絶望・昭21）。

一九四六年五月、東京外事専門学校（現東京外大）にバスしたが、校舎が戦火で焼失していたため、強制休学」という奇妙なハメとなり、北海道放浪に私は旅立った。上野から汽車に乗る前に、浅草を何年ぶりかで見た。やはり暑い日ざしの昼下がり、地下鉄の入口で高嶋易断の脣を、虱たかりの爺さんが売っていた。交番だけが焼け残り、雷おこし本舗はパラック建てで復活していたが、セトモノの見本と看板だけ、いったいどんな商売をしているのやら、見当もつかなかつた。仲見世は戦災にほとんどあわず、老若男女があふれ、活気はむかしに異ならなかつた。

だが、その雑踏は觀音様を目ざしてではなく、ヤミ市と化した店並に蠅集して、ポツネンと旧本堂と仁王門のあいだに建てられた、ちっぽけな、四間四方の仮本堂に、参詣している人の姿はなかつた。

ここもまたヤミ市、六区にむかって露店がひしめき、ふかし芋やらボン煎餅、まつ黒なフスマ入りのパン、軍隊毛布、編上靴等を、所せましと商つていた。夏草の茂る弁天山の

鐘つき堂、浅草神社の猿音舞臺、あの廻かけ銀杏が花しく人待顔に、おみくじをたつた二、三本括りつけられて立つていた。『如何なる星のもとに』の玲ちゃん、踊子の姿などむろんなく、子供のころよく見かけた小糸な芸者衆、女将さんはまして、キツネが化けて出たところでそぐわぬ風情と見えた。

本堂を裏にまわれば、コジキの総本山・淡島神社、泉水のまわりに浮浪者がごろ寝をして、パンパン・ガールとおぼしい女ども、あちこちにたむろしていた。いっぽし硬派の不良少年、ケンカなら自信はあつたが、はづかしながらいた童貞、荒んだ眼をしたお姐さんは、なぜかおそろしく、声でもかけられたらどうしようと、視線をそらして通りすぎるので、案のじようオニイサン、坊や可愛がつてあげようかと雨あられ。

それから二年もせずに、上野の地下道や山谷のドヤ街で、彼女たちのヒモ的指導者にならうなどと思いもよらぬ、紅顔可憐の美少年（？）は、足早にその場を逃げ去つたことだつた。

いまは埋め立てられて面影もない、ヒョウ

タン池のほとり、六区の劇場街をむこう岸にみる、といつてもモソの煮込み、サツマ芋とカボチャのぜんざいを商う屋台店で、目線をさえぎられていたが、そのあたりは泥棒市場だつた。ゲソロップ（靴下）、スイビラ（手ぬぐい）の竿下、干し物荒しのケチな小泥棒から、ハイコロ（自転車）、洋ラン（服）、ケイチャン（時計）、チャリヨンコやノビ師と呼ばれる窃盜、強盗のプロフェッショナル。

果ては手前の着ている服やズボンを、身の皮はいで売つてしまおうという連中に至るまで、青天井のもと白昼堂々、故買人と交渉をしているのであつた。敗戦三文オペラ、『田舎者歩く』という焼跡小説を、旬刊ニュース』誌上に載せていた武田麟太郎は、この風景を見ていたのだろうか？ あの傑作『日本

浅草に夜はなかつた

されど老樹は猶枯れやらず、頼かけ銀杏の緑は芽ぶき、汚物をうかべてハイキーに映りかえす、ヒョウタン池のよどみはそれでも、青い藻に彩られていた。なつかしい樂天地のスポーツランド、射的のダルマ落し、ウーと

三文オペラ』戦後版を、なぜ書かなかつたのかと私は疑つた。麟太郎は酒毒に惟粹して、その年の三月三十一日に世を去り、文壇は挙げて坂口安吾、織田作之助、太宰治のいわゆる『戦後派三羽鳥』の時代であつたが、安吾はともかく他の作家には違和を感じていた。仲間の文学青年たちは嗤つたが、私は新たなプロレタリア小説こそ、焼土からおこらねばならないと思っていたのである。とりわけ田村泰次郎の娼婦もの『肉体の門』などに描写された欺罔に、義憤とすらいえる怒りをいだいたのは、窮女の世界に身を置いたやで、後年のことに属する。一九四六年五月、敗戦から十カ月と経たぬ初夏、荒涼たるわが街・浅草の情景に、窮民の文学がかららずおこることを、私は信じていた。

唸つて鉄棒を持ち上げる鬼退治、五発二円のおたのしみ。木馬館の周辺にはテント張りの小屋掛けが立ちならび、因果物のロクロ首、蛇女、あの衛生博覧会も健在で「さあさあいらはい、いらはい！」と客を呼んでいた。

「ホンモノの金指輪・十円」なり、ジンタの響きに乗って、メリーランドは廻る。レモン水、アイスまんじゅう、これも『絶対本もの』と銘を打つた、牛、肉、チキン汁なる怪しげな喰いもの。縞蛇の死体を横たえて、「諸君！人生の幸福とは何ぞや、金でなし名誉でなし地位でなし、一にも健康、二にも健康、このイキのいいマムシの黒焼を」と、大声はりあげる香具師の薬売り、松井源水のコマ廻しも店を出して、浅草名物の露天商はいち早く復活したのだが――

ラバソールの靴にトックリズボン、両手をなげか申しあわせたように、ポケットに突つこんで、野球帽に半袖の開襟シャツ、刺青をチラチラさせた可兄連が、わがもの顔に潤歩する。その道路ぎわでは裸足のオッサンや、赤ん坊を抱いた垢だらけの女が、肌をぬいでシラミをとつて。池のまわりはジプシー天国、四十をとうにすぎた顔をしているのにお河童頭で、汚れたリボンをつけたジキパン（乞食娼婦）やら、吸殻をまきなおしているよれよれの婆さんやら、一目でそれとわかる女装の男たちやら、戦前から乞食ルンパンの男たちの黒い影と、ここかしこの闇にもぞも

メツカといえ、およそ四、五百人もがすえた体臭を発散してたむろしている図は、まさに敗戦地獄圖繪。『エロスの祭典』という轍がピラーツとひるがえり、六区の常盤座にあの阿部定が実演で出るというポスターが、風にはためいていた。

いや、記憶が混乱しているのだ。阿部定の実演はたしか一九四七年、その翌年であつたはず。ヒヨータン池を眺めている私の耳に、そのときおあつらえむきに「こんな女に誰がした」菊地章子のうたが流れてきたように思ひこんでいるのも錯覚。それは、『或る夜の接吻』の主題歌「悲しき竹笛」だった。若原雅夫・鈴木美智子主演、ひとり都のたそがれ夜を稼ぐものの星の宿であり、懐いのターミナルとして機能していた。

一九四六年に私が見た、それがわが街の実態だった。啄木ではないがどうして、それをりかえして小屋がはねた、表に出ると人通りは絶えて、街は暗黒に近かつた。カーバイトの灯がわざかに点つて、イカの丸煮、海宝麺の屋台が二、三軒、敗戦の浅草に夜はなかつた。ヒヨータン池で水浴をしている、ジプシ

ぞと蠢めく、アオカソ（野宿）の男と女と、昼間だけの盛り場、人々は夜を稼ぎに出かけていくのだということを、うかつにも私は考へなかつた。

……女たちは上野へ、有楽町へ、あるいは新橋・池袋・渋谷の『職場』に、春を売りにいくのである。男たちもまた何かを拾いに、あるいは盗みに、東京中に散っていく。浮浪犯の巣窟として、警察の集中的取締りをうけた浅草は、いうならば戒厳令下に等しく夜は無人の街となつて、純然たる宿無しと、

パトロールの警官隊が、灯を消したエンコに居残るのである。夜のない浅草は、すなわち夜を稼ぐものの星の宿であり、懐いのターミナルとして機能していた。

一九四六年に私が見た、それがわが街の実態だった。啄木ではないがどうして、それを浅草と呼べようか。夕景からの巷のにぎわい、とりわけユカタ姿の夏の雑踏、宵っぱりの庶民たちがあつてこそ、お江戸の盛り場。九時前というのに、文字通り火の消えてしまった浅草に、敗戦の悲哀と屈辱を見た。

余談ではなく今まで、その後遺症は尾を



ひいて、浅草の活気はとり戻すすべもない。ヒョウタン池を左に見て、六区の劇場街を右にグランド、大勝館、ストリップ以前のロッカ座、ばんじゅん『男娼の森』の看板をいちべつして、『三館共通』の千代田館・電気館

場の先を、日本館の手前で右に折れると田原町。その間に、二度も不審尋問、ボリ公の誰何にひっかけられて、私はむかむかしながら、上野駅にむかって歩いて歩いていった。

飢餓線上のニッポン

この年四月に総選挙、五月一日戦後第一回メーデー、『民主化』の波は滔々とニッポン

低国を洗っていた。食糧メーデー(5・19)二十五万人のデモに参加して、革命が明日にでもくるような昂奮をおぼえた

のも束の間、北海道を放浪している間に、生産管理は禁止され、救國民主連盟とやらから共産党排除、新聞スト敗退と、キナクさい臭いが立ちこめはじめた。警視庁保安部生活課は「都民はどうして喰っているか?」という『白書』を発表した、幸い手もとに資料がある。

一日中代用食で暮している家庭は、失業者二九パーセント、会社員一二パーセントを占め、「糠の団子や芋葉汁の最下等食

料」を労働者の一一パーセントが常食としている。欠食(昼メシぬき)、弁当を持たずに勤めに出る家庭も、会社員の一六パーセント以上する。それにひきかえ、会社重役・医師等は一〇〇パーセント三食米飯、または外食といふ数字は、戦後の貧富のありようを示している。『民主化』は胃袋にまでは及ばず、飽食する者と餓え迫る者との間に、落差はひらくばかりであった。都下上板橋第三国民学校調査による、保護者父兄のアンケート、「弁当を毎日持参させることは困難か?」という問い合わせに、六八パーセントが、非常に困難であると回答している。そして次の問い合わせ、「三食中、カユ又は雑炊が何食か?」に対し

て……

一度もなし

三度ともカユ雑炊、又は代用食

二食米ぬき

一食 リ

2%	25%
27%	46%

……七月、東京都では米の配給、一ヶ月に二日、ないし三日(地域によって異なる)。虫のわいた放出メリケン粉、水にさらさねば喰えぬ泥のまじったデンブン、フスマ、鬼の牙

のようく煮ても焼いてもやわらかくならぬトモロコシ、燕麦、沖縄一号と称する水つぱい甘薯、果てはリンゴ・ジャムの壇詰め、ぼろぼろに折れた乾麺の屑、これも虫喰いの大豆、マメカスの固まりといった、とうてい“主食”とはいえない、人間の喰いものとも思えぬモノを、飢餓線上の民衆に國家は提供

した。北海道から九州へ私は放浪した。そして食わんがために、百姓の手つだいをして、開行商の片棒をかついだりしながら、親戚や知人の家をたよって、北は網走から南は阿蘇山中まで、われながらしたたかに、敗戦後の修羅を生きぬいたのである。どうやら学園は復興して、西武線の上井草の旧中野学校

跡に飯の校舎を定め、ようやく授業が始まった。

一といって親からの仕送りはなく、寮費十円の九段学生会館に転がりこみ、マムシの黒焼のセリフご同様、一にも二にも健康な肉体を、土方・人夫の労働で酷使して、学費を稼ぎ出さねばならなかつた。

在外同胞救出学生同盟に参加して、引揚者援護の運動にたずさわつたのはその年の夏、母方の祖父・叔父たちが、朝鮮・カラフトに残留していたためであつたが、一つには学業と労働とは両立せず、“運動”にせめて専従することと、またぞろ休学の理由をという、甘い計算からであつた。

だが、引揚者の世話活動とは、とりもなおさず荷物運びと、列車添乗の重労働であり、“報酬”は東京都から月々支給される、九十枚の外食券のみ。セツツルメントでの苦惨な体験は、これも『無頼と荘冠』、そのほかに記述してある。浅草に再び足をむけたのは一九四七年の暮頃から、本堂だけが焼け残った本願寺の裏に、これも『如何なる星のもとに』の惣太郎、音曲吹きよせの林家染太郎の



夫じ人が経営している、お好み焼き屋があつて、大井広介（この人も亡くなつた）、坂口安吾らが常連だつたが、その染太郎ではなく、ロツク座のコメデアン海野かつをの実家である「海野」、寺の門の焼けのこりに、こわれたポンプ井戸が目印のその店に、詩人の草野心平氏につれていつてもらつたのである。

心平さんとのつきあいは、コモリガサをカタに「火の車」で飲ませてもらつたのが因縁であつた。けつきよくは、おのが飲みつぶしてしまつたと、この居酒屋は文壇史の「伝説」になつてゐるが、私のような客にも責任の一端はある。だいたいが、商売はデタラメで、九段下に店があつたころなど、はり出した品書きが何であるかを当てれば一杯、

といつた調子だつた。それが「赤と黒」は品川巻ぐらゐのじつに簡単な謎々で、タダで人に呑ませるための冗談としか、私はうけとれなかつた。コモリガサの一件でも、金がないからと遠慮する私に、その傘で飲みたいだけ飲ませてやるぞと、心平さんのほうからいい出したのだ。

店をしめてから「浅草へ行こう」とおつし

やる。夜はだめでしようと物語り顔にいうと、馬鹿メやつとるところはやつとるんだ、子供が知つたかぶりをするなど大変なごきげんで「海野」でデキ上つた詩人は、表通りにまだ戦火の名残りを止める防火用水の桶やら、ゴミ箱やらを片つ端からひっくり返して歩いて、手のつけようもない大酒乱ぶりを發揮したのであつた。

じつさい何という佳き人たちに、焼跡で会つたことかと思う。

後年知己を得た仲沢清太郎さんも、「三太太」といひのラジオで名を亮つた。もと活弁ストライキの酔いどれ役者・恩田清二郎（鳴呼みんな死んでしまつた！）も、浅草という街

を仲立ちにして出会い、なつかしい想い出を残してくれた。

野一色幹夫さんが主宰していた、「浅草」で、高見順氏と同席をしたときに、故・南部橋一郎先生（私の師と呼ぶゆい一人である）から、「オヤジの話ををしておけよ」とすすめられたのだが、左翼芸術家同盟で戦前ともに闘つた竹中英太郎の件ですと、ついに言ひ出すことができなかつた。

荷風散人との出会いを、ゆきすりに席をゆずつただけで、すませてしまつた私は、心平さんのばあいも名前さえ告げず、コモリガサの不良少年で通してしまつたのだ。高見順氏に対しても。

父のことなど……

青春時代、私は父について語ることに、屈折した思いがあつた。戦後はマスコミから姿を消した父親に、七光りの負い目はなかつた。アナキズムから国家社会主義へ転向を遂げて、いつた、戦前の父親の「思想」を長い歳月、私は理解することができなかつた。はつきりいえば、それを恥としていたのだ。其産党にまことに父の転向を理解した。そして陋巷に（みづからは意識せず）アナキズムの影を踏んで、つ

うことを、三十も半ばをこえて悟ったのである。それはさておき――

巷は餓えていた、一年半ぶりに見る浅草の情景は、季節が冬であつたから一層、陰惨の度を加えていた。ヒヨウタン池の屋台店は、ウドンの上に煮こみをぶつかれた、ちょっと見には量もゆたかな、ボリュームたっぷりの体裁をととのえていたけれど、「十円ヨリ」という、虫眼鏡で見なくてはわからぬほどのヨリの木札が置かれて、ついにうつかり喰った客は、三十円は愚か五十円もフンだくられる仕掛けになっていた。

「染太郎」「海野」の表、浅草本願寺の床下には、戦災者厚生寮と看板かけて、焼け出されの人々が収容されていたが、これがとんでもないタコ部屋であることを知る人ぞ知る。シケモクの仲買いやら露店商等で「数万円も金をためた浮浪者がいる」と新聞に報道された内実は、真木康年というゴック上りのエセ右翼、新鋭大衆党の「慈善事業」だった。四年反共メーデー、四七年には全国反共団体協議会、産別議長の聴濤克己刺傷事件と、コワモテで売り出したこの人物は、ヒヨウタン

池のほとりで浮浪者救済と称する焚出しを、雑炊一丼五円ナリで行つておつた。

タダではなく五円、これがうらなり南瓜の塩汁で、満腹したためではなく岩塩のアツで胸にもたれるしろものだ。

もともと、金龍館前の露天商、一百に足りぬせいぜい五十軒ほどの親分だったが、「浅草新聞」と称するタブロイドを、自由党あつたりからせしめたにちがいないヤミ用紙で発行、いちやく地元の名士となり、戦災者救済を看板に政治運動に乗り出したのである。

在外同胞救出学生同盟から引揚学生同盟と

それぞれの生きざま

そもそも、戦災に会った人々が、本願寺に着のみ着のまま避難をして、住みついたのがシケモクの仲買いやら露店商等で「数万円もコトのはじまり。大慈大悲と最初はかまえていたお寺も、人数がむやみに増えていくに不安をいだいて、エンコの親分に“統制”を依頼した。これが当時、愚連隊の元締めで、泣く子も黙る血桜団の客分、中井勝太という男である。はじめの間は自治組織的運営で、都から感謝状を贈られるという、評判のよい

改称し、さらに事務局を私たち共産党のフランクが乗つとり、東京学生同盟と組織替えをする。それは一九四八年のことだが、引揚者東京連合会の文化部長・兼引揚学生同盟の対内部長、仮泊所セツツルの責任者を私は担当していたので、都の援護局などを通じてさまざまに戦災・引揚団体と、接触をする機会があった。高名なる真木康年先生にも、たしか自由党的原作（故人）に、紹介された記憶がある。浅草本願寺の地下をおとすれたのは、四年の極月も大みそかに近い、クリスマス・イブであった。

すべり出しであつたが、シケモクの“拾い”“巻き”“卸し”という一貫作業、古物商の名目での故賣、それを田舎に持つていき米と交換してくるグループなど、企業化（？）がすすむにしたがつて、“統制”は暴力的な色彩を帯び、ギャングの利権が絡んできた。まずは血桜団の若い連中が、ゆすりたかりを働き、チエリー・ピースの空箱につめて一箱十円の「更生煙草」を、強制的に三円で貰いた



中井は血煙団の手下に造反されて、旧知の佐々木松雄なるボスに権利をひき渡す。この仁がまことに悪玉で、上野公園の不忍池を

タンボにして、私たちの縄張りの引揚者や、戦災者に稻を植えさせ、収穫米は愚かなこと都からの援護物資をことごとく着服、批判の

声を挙げた下谷の革新区会議員を一人残らずブン殴り、みずから昭和の二宮尊徳と称して（上野田甫の開拓者）、エバつておった人物なのである。

目によるところに玉はよるで、真木康年と

呑みわけの兄弟分、たちまちワルダクミ成立、本願寺の床下は新鋭大衆党的根拠地

と化した。党員三百名と称して、

なるほど動員力は右翼団体の中

で、もつとも強力であつたが、タ

ネをあかせばすべてこの床下住

人。『共産党宣言』ではないが、ルンブロは反動の策謀に投げこまれる、典型的な例証ともいえた。

私がおとづれたのは、真木康年が都補助金横領、特配物資横流しの容疑で検挙されて、小菅の刑務所に送られた直後だった。しかし子分の齊藤ナニガシ、そのまた子分の木村某という、朝鮮国籍のクリカラモンモンがまだ頑張つておつた。引揚学生同盟からのプレゼントを、というのはフランガン神

父の厚意で贈られた下駄を（このことも朝日グラフ引揚特集号に書いた）、正直にいうとも余しておらずそわけに歩いたのだが、世間の悪評とはいさか異なる実相を、私は右翼の経営する地下寮に見た。

なるほど真木康年、この戦後右翼の「英雄」は、インチキであつたに相違ない、子分どももご面相からして心情卑しき連中であった。人々はあきらかに收奪され、暴力の支配のもとに置かれていた。本願寺の床下を仕切つた、日もささぬ暗い部屋には、二百数十名の住人に風呂一つしかなく、雑居家族の中に胸を病む者が多く、子供たちは栄養失調で瘦せこけ、首筋は南京虫の喰い痕が、点々と赤い数珠をつないでいた。トラホームの婆さんが床下の入口、共同炊事場がそこにあるのだが、よごれた洗面器でメシを焚いていた。狩り込みで坊主頭にされた若い娘が、ブンガワンソロの口笛を吹いていた。木枯しが電線を鳴らす、敗戦三年目の切ない歳の暮れであった……。

こんりんざい、陋巷に慈善・救済の看板をかかげ、正義を売りものにする手合を、私は



信用しない。それは、このときの体験からである、ちかごろ山谷で毛沢東派の自称詩人が焚出しを行っているが、私には“新鋭大衆党の同類”であるとしか思えないのだ。

ところで床下の住人たち、ギャングにたらいまわしにされた、左翼的常識でいうなら虐げられた、犠牲者であるべき人々は、かえつて真木康年を検挙した警察にウラミをいだき、東京都の行政下に直接置かれることの不安に脅えていたのだ。彼らにとつて、暴力団よりはるかに、オカミは恐怖すべき存在だった。

新鋭大衆党の制服を着せられて、デモにひっぱり出されることと、タバコ銭を予分どもに時にたかられることを除けば、ここは自由であった。焼け出されて戸籍まで失なった者、ささやかな前科持ち、家出し人、とうぜん赤札(指名手配)、捜査願いを背負っている者もいれば、その他の事情で本名・前歴をかくしたい者もいるのだ。それが、地の底に生きる人々の、最後の自由であるということ。いや実はそういう、国家や社会に拘束されない、無政府の生きざまこそが、真人民のあるべき

